

平成22年度 企画展示
「遠野物語」100年



「遠野物語」の世界

わたしを呼ぶ声… 口承を記す

柳田國男 佐々木喜善 高木誠一

— 目 次 —

『遠野物語』100年…1

『遠野物語』の誕生…2

物語の主人公たち…4

『遠野物語』の作者たち…7

柳田國男

佐々木喜善

『遠野物語』関連年表…9

いわきを記す 高木誠一…11

参考・関連資料…12

期 日 平成22年7月15日(木)―9月26日(日)

休館日 7月26日(月) 8月30日(月)

時 間 10:00―21:00

(日曜日・祝日 10:00―18:00)

場 所 いわき総合図書館 5階 企画展示コーナー



1 『遠野物語』 100 年

『遠野物語』は、岩手県遠野出身の佐々木喜善が話した伝説や口承を、柳田國男が筆記して、明治 43 年(1910)6 月に出版されました。今年はその刊行から 100 年にあたります。この 100 年の間に、人々を取り巻く社会環境や、生活様式が大きく変化しました。そして、人々の意識や考え方も変わり、『遠野物語』も多様な読み方が、試み続けられてきました。

『遠野物語』の舞台となる遠野郷は、岩手県中央部の盆地にある地方都市です。江戸時代には遠野南部氏の城下町として栄え、内陸部の花巻と海岸部の釜石などを結ぶ物資の集散地であり、他郷の人たちが往還する中継地として賑わいました。そして、町の繁栄の一方、早池峰・六角牛・石神などの山々に囲まれ、猿ヶ石・早瀬・来内などの川が流れる里の暮らしが営まれ、伝説や家の伝承、怪異譚などの話が語り伝えられていました。

また、作者・柳田國男は、いわきの民俗研究に大きな影響を与えました。いわき市平北神谷（当時・北神谷村）に生まれた高木誠一は、早くから柳田に師事し、柳田や佐々木の民俗研究に協力し、貢献しました。そして、柳田の薫陶を受け、いわきの民俗学の基礎をつくりました。

この展示は、『遠野物語』の物語世界とその口承、『遠野物語』の作者たちと高木誠一との関わりなどをたどります。「『遠野物語』の世界」展をお楽しみいただき、図書館資料をご利用いただく機会としていただければ幸いです。

いわき市立いわき総合図書館

平成 22 年度企画展示
遠野物語 100 年

『遠野物語』の世界

わたしを呼ぶ声…口承を記す
柳田國男 佐々木喜善 高木誠一

発行 2010 年 7 月 15 日
いわき市立いわき総合図書館
福島県いわき市平字田町 120
〒970-8026 ☎22-5552

2 『遠野物語』の誕生

『遠野物語』と『遠野物語 増補版』

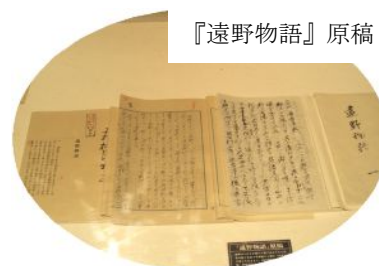
(1) 『遠野物語』の成立

『遠野物語』は、岩手県遠野、土淵出身の佐々木喜善が話した、遠野郷の伝説や口承を、柳田國男が119話を所収し、明治43年(1910)6月、350部を自費出版した。柳田はその序文に、この話は佐々木鏡石(きょうせき・喜善の筆名)から聞き、「一字一句をも加減せず感じたるまま」書き、「これ目前の出来事」であり、「現在の事実」であると述べ、その献辞には「この書を外国に在る人々に呈す」と記した。しかし、当時この本に注目したのは、ごく一部の研究者にすぎなかった。それが今、広く親しまれるようになった『遠野物語』は、民俗学におけるすぐれた村の記録、また、詩的空間に満たされた素晴らしい文学作品である、と評されている。



『遠野物語』初版

柳田國男は、明治33年(1900)農商務省に勤め、明治41年(1908)5月末から三カ月におよぶ九州旅行をした。その途中に日向、椎葉(しいば)村で狩猟の話を聞き、これを翌年3月、『後狩詞記』(のちのかりことばのき)として50部を自費出版した。九州から帰った柳田を同年11月4日、水野葉舟(みずのようしゅう)に伴われて佐々木喜善が訪れた。水野と佐々木は同じ下宿であった。佐々木は文学を志して上京し、哲学館(現・東洋大学)へ入り、その後、早稲田大学へ移っていた。柳田は、佐々木が話す遠野の話に関心を深め、毎月2日の夜に佐々木を自宅へ招いて、彼の話を書き記した。



『遠野物語』原稿

『遠野物語』は、佐々木の話を書き記し、草稿(佐々木の筆の痕跡もあるといわれる)、校正されて出版された。その奥付には、明治43年(1910)6月14日発行、著者兼発行者を柳田國男、実価50銭、売捌所として聚精堂(しゅうせいどう)が記されている。第一号は「御初穂ハ佐々木君ニ 国男」と署名され、佐々木に贈られた。しかし、草稿と出版された『遠野物語』では佐々木の話が大幅に修正されていた。

青春時代の柳田は、新体詩人としての才能と将来性を高く評価されていた。しかし、柳田は当時の日本ではまだ確立されていなかった民俗学の分野に挑み、この文学民俗誌『遠野物語』が誕生した。このとき、佐々木は満23歳、柳田は34歳だった。



遠野駅前に建つ『遠野物語』文学碑

柳田が佐々木と出会い、遠野を訪れたのは明治42年(1909)の8月であった。そのころの遠野には古い民俗や習俗が継承され、伝統と文化の伝承者たちがいた。そして、かつての日本の山村の姿を残している、当時でもめずらしい場所が「遠野」だった。

(2) 『遠野物語 増補版』(遠野物語拾遺)の成立

『遠野物語』出版の後、柳田は『遠野物語』の続篇も出版したいと考えていた。柳田の勧めによって、佐々木は次々と資料を送っていた。しかし、柳田の執筆はいつこうに進まなかった。やがて、待ち切れなかった佐々木は、昭和6年(1931)1月、『聴耳草紙』(ききみみぞうし)を出版した。その中には柳田に送った資料との重複が多くあった。

昭和8年(1933)9月、佐々木が47歳で亡くなった。

佐々木の資料の散逸を惜しんだ柳田は、昭和10年(1935)、折口信夫(おりぐちしのぶ)の門下生であった鈴木脩一(すずきしゅういち)に、未整理資料の書き改めや、編集などを一任した。それらは4、5カ月でまとめられ、書名の筆を金田一京助がとり、柳田の「再版覚書」、「遠野物語拾遺」299話、折口信夫の「後記」などが増補され、『遠野物語 増補版』として同年7月、郷土研究社から出版された。

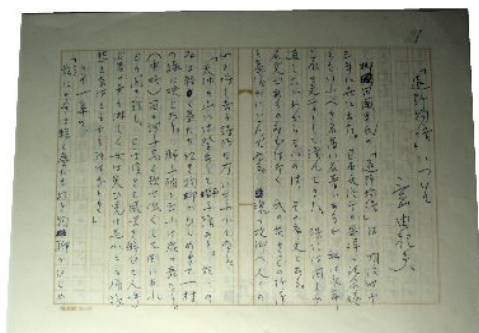
『遠野物語 増補版』は、初版『遠野物語』の出版から25年後、柳田の還暦の祝いと佐々木の三回忌を追善する書となった。

この『遠野物語 増補版』は、初版『遠野物語』とは異なり、研究者たちの書評が相次いで出された。それは、初版『遠野物語』が一般の人たちにも知られるようになる契機ともなった。そして『遠野物語』が文学作品としての地位を高めたのは、三島由紀夫が昭和45年(1970)に発表した論評だった。



釈迦空(折口信夫)の「遠野物語」歌碑。折口は「遠野物語増補版」の刊行に尽力した。

高木誠一
「遠野物語」求む!



読売新聞に発表された三島由紀夫の『「遠野物語」について』の原稿

高木誠一『磐城北神谷の話』第二部民俗書簡集より
柳田からの書簡(六三頁)
「―。遠野物語今に見つけおくるべく候。」
佐々木からの書簡(八五頁)
「―。次に遠野物語ですが、実のところ私の許にも一冊も御座いませぬ。あったのを紀州の某氏に貸しましたところ、其後どうしても返してくれませぬ。―。柳田先生のところになければもう最後です。―。柳田先生」



3 物語の主人公たち

オシラサマ

昔あるところに貧^{まず}しき百姓あり。妻はなくで美しき娘あり。また一匹の馬^かを飼う。娘この馬を愛して夜になれば厩舎^{うまや}に行きて寝^いね、ついに馬と夫婦^あになれり。或る夜父はこの事を知^{くわ}りて、その次の日に娘には知らせず、馬を連れ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬のおらぬより父に尋ねてこの事を知り、驚^{おどろ}き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首に縋^{すが}りて泣きいたりしを、父はこれを悪みて斧^{にく}をもって後より馬の首を切り落とせしに、たちまち娘はその首に乗りたるまま天に昇り去れり。馬をつり下げたる桑の枝^{えだ}にてその神の像を作る。(第69話一部省略)



オシラサマ (伝承園)

オシラサマの由来話は、遠野でも土地によって違いがある。天竺の長者の娘の話であったり、また、娘は馬の皮で小舟を作り、桑の木の櫂で海に出るが、遺体で海岸に打ち上げられたという話もある。『「遠野物語」拾遺 77』

サムトの婆

松崎村^{まつざき}の寒戸^{さむと}というところの民家にて、若き娘梨^{なし}の樹^きの下に草履^{ぞうり}を脱ぎ置きたるまま行方を知らずなり、三十年あまり過ぎたりに、或る日親類知音の人々その家に集まりてありしところへ、きわめて老いさらぼいてその女帰^おり来たれり。いかにして帰って来たかと問えば人々に逢^あいたかりし故^{ゆえ}帰りしなり。さらばまた行かんとて、再び跡^{あと}を留^{とど}めず行き失せたり。その日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷^{とおのごう}の人は、今でも風の騒^{さわ}がしき日には、きょうはサムトの婆^{ばば}が帰^きって来そうな日なりという。(第8話一部省略)

サムトは存在しない地名。松崎町登戸(のぼと)とする話がある。娘の名前は佐々木サダ、明治維新前後を生きた。老婆は毎年やって来るようになり、そのたびに大風雨があってひどく難渋した。ついには、村方から命じられ、その家では仕方なく村境に石塔を建て、巫女や山伏を頼んで、「ここより内には来るな」と呪的な道封じの儀礼をおこなった。それから老婆は来なくなったという。そのとき建てられた石塔は、大正初年の大洪水のときに流失した。

『東奥異聞』

喜善の祖母が生まれた家は、六角牛山に一番近い山の中の一軒家だった。ここには、モン助婆(サダ)が風雨の激しくなる前に山から降りて来て、小屋の軒先でじっと天気のおさまるのを待ち、晴れるとまた山に登っていった、という話を祖母は喜善に伝えている。

『「遠野物語」を歩く』



「サムトの婆」の碑

ザシキワラシ

村の何某なにがしという男、町より帰ると留場の橋のほとりにて見馴れ
 ざる二人のよき娘あに逢えり。お前たちはどこから来たと問えば、お
 ら山口の孫左衛門まござえもんが処ところから来たと答う。これから何処へ行くのか
 と聞けば、その村の何某はなが家にと答う。その何某はやや離れたる
 村にて、今も立派に暮らせる豪農ごうのうなり。それより久しからずして、
 この家の主しゅじゅう 従二十幾人、茸いくにんの毒きのこに中りて一日のうちに死に絶え、
 七歳の女の子一人を残せしが、その女もまた年老いて子なく、近き
 ころ病みて失せたり。(第18話一部省略)



柳翁宿 (旧高善旅館)
「とおの昔話村」

遊びに出かけていて、残された女の子の名前はミナ。明治30年に生まれ、後年
 はオミナ婆と呼ばれていた。昭和30年代に亡くなり、子どもはなかった。また、
 遠野でのザシキワラシの話は昭和32年までであった。味噌醤油醸造会社の破産直前
 の朝方、この社長宅を出た二人の子どもが手を組んで通りを抜け、ある建材店へ入
 って行った。この子どもたちの姿が目撃された。 『「遠野物語」を歩く』



かっぱ淵

カッパ

こがらせがわ おぼこふち しんや うち
 小鳥瀬川の姥子淵の辺に、新屋の家という家あり。ある日淵へ
 馬ひやを冷うまひきしに行き、馬曳の子は外へ遊びに行きし間に、川童出でて
 その馬を引き込まんとし、かえりて馬に引きずられて 厩うまやの前に
 来たり、馬槽うまふねに覆われてありき。家のもの馬槽に伏せてあるを怪
 しみて少しあけて見れば川童の手出でたり。村中のもの集まりて
 殺さんか宥さんかと評議せしが、結局こんご 今後は村中の馬いたずらに悪戯かたをせぬという堅き約束をさせ
 てこれを放したり。その川童今は村を去りて相沢の滝の淵に住めりという。(第58話全文)

馬ひきで有名な河童は、「かっぱ狛犬」がある常堅寺近くの河童淵の話である。
 この河童は家を守り、富貴を約束して座敷に住むことが許された。また、遠野には
 「河童の子を産んだ」という話も残る。しかし、その解釈や推論は、まだ解禁され
 ていないと考えられている。 『「遠野物語」を歩く』



田植えの手伝いをしたと
いう阿部家のオクナイサ
マ (第15話)

オクナイサマをまつる

オクナイサマは、毎年1月
 15日、新しい着物と頭巾が着
 せ替えられ、家の神仏ととも
 に毎朝、お参りされている。
 このオクナイサマは、目の病
 気を治してくれるといわれ
 ている。

(阿部家の人たち 右写真)



魂の行方

佐々木氏の曾祖母としよりて死去せし時、棺に取り納め親族の者集まり来てその夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にて乱心のため離縁せられたる婦人もまたその中にありき。喪の間は火の気を絶やすことを忌むがところの風なれば、祖母と母のみは、大なる囲炉裡の両側に坐り、母人は旁に炭籠を置き、炭を継ぎてありしに、ふと裏口の方より足音してくる音あるを見れば、亡くなりし老女なり。平生腰かがみて衣物の裾の引きずるを、三角に取り上げて前に縫いつけてありしが、まざまざとその通りにて、縞目にも見覚えあり。あなやと思う間もなく、二人の女の坐れる炉の脇を通り行くとして、裾にて炭取にさわりに、丸き炭取なればくるくるとまわりたり。母人は気丈の人なれば振り返りあとを見送れば、親縁の人々の打ち伏したる座敷の方へ近より行くと思うほどに、かの狂女のけたたましき声にて、おばあさんが来たと呼びたり。(第22話一部省略)

三島由紀夫が「あ、ここに小説があった」と『小説とは何か』に書いた話。喜善の曾祖母は、祖父(万蔵)の母・ミチ。ミチが亡くなった通夜の出来事として伝えられた。死者の娘で離縁された婦人は、万蔵の妹・トヨ。祖母は万蔵の妻・ノヨ。母は養母・イチ。次の第23話は、二七日忌の前夜の法事に集まった人たちが帰る時、門口の石に死者の老女が腰かけているのを見たという話である。この老女にはどんな執着があったのか。

『図説 遠野物語の世界』



土淵から六角牛山を見る

山人

佐々木嘉兵衛という翁、若かりしころ獵をして山奥に入りしに、遥かなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪を梳りていたり。顔の色きわめて白し。不敵の男なれば直に銃を差し向けて打ち放せしに弾に应じて倒れたり。そこに駆けつけて見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黒髪はまたそのたけよりも長かりき。のちの験にせばやと思ひてその髪をいささか切り取り、これを縮ねて懐に入れ、やがて家路に向いしに、道の程にて耐えがたく睡眠を催しければ、しばらく物陰に立寄りてまどろみたり。その間夢と現との境のようなる時に、これも丈の高き男一人近よりて懐中に手を差し入れ、かの縮ねたる黒髪を取り返し立ち去ると見ればたちまち睡は覚めたり。(第3話一部省略)

銃で撃たれた女性は佐々木トヨ。当時42歳。喜善の祖父(万蔵)の妹。トヨは十代で近くの豪農に嫁いたが、甘やかされて育った夫と義母との板挟みになり、精神を病み実家に戻る。数年後、病死して葬式をすませた。しかしその後、六角牛山の笛吹峠の対岸、オガセの滝近くにトヨの姿を見かけるようになった。寒中だったのでトヨの遺体はソリに乗せて運んだ。婚家から精神の錯乱の代償に与えられた田の真ん中に、二つ目の墓がつくられた。『山深き遠野の里の物語せよ』

(2) 佐々木 喜善

ささき きぜん (1886. 10. 5 - 1933. 9. 29)

明治 19 年(1886)、岩手県遠野市土淵(旧、西南閉伊郡栃内村)の厚楽家の長男に生まれるが、父・茂太郎は出生前に急死する。母・タケは再嫁し、子がなかった母の実家の佐々木家を継ぐ。祖父母、万蔵とオノ(通称はノヨ)から多くの昔話や伝説を聞いて育つ。盛岡の岩手医学校に進むが退学。



佐々木喜善
(佐々木喜善記念館)

明治 38 年(1905)、妖怪学で著名な井上円了がいた哲学館(現在の東洋大学)に入学するが退学。文学を志し早稲田大学に移り、同じ下宿にいた新進作家、水野葉舟と知り合う。「佐々木鏡石」の筆名で小説や詩を発表し、前田夕暮、三木露風、北原白秋たちと交友する。水野によって怪談の名人といわれ、明治 41 年(1908 年)柳田國男を訪れて遠野の話をする。この話をもとに柳田は『遠野物語』を著す。佐々木は作品を発表しながら外国語の習得に励むが、明治 43 年(1910 年)10 月、病気のため後に妻となる千田マツノと帰郷する。

遠野に戻ってからも作家活動を続けるが、民俗学者へと変貌していく。郷土の伝承や昔話を収集研究し、柳田が主宰する雑誌「郷土研究」などに発表する。『奥州のザシキワラシの話』を出版し、ロシアから留学していたニコライ・ネフスキーとオシラサマの共同研究をする。その後は昔話の研究が中心となり、『江刺郡昔話』(えさしぐんむかしばなし)『紫波郡昔話』(しわぐんむかしばなし)『老媪夜譚』(ろうおうやたん)などを出版する。そのかたわら、土淵村の村会議員や村長を務めたが、同時に多額の負債を負うことになった。

昭和 4 年(1929)2 月、財産を整理し仙台に移り住む。ラジオで「東北土俗講座」を開き、柳田國男、折口信夫などに講演依頼をする。東北各地から資料を集め、当時としては最大の昔話集『聴耳草紙』(ききみみぞうし)を出版する。しかし、生活はきわめて困窮した。昭和 8 年(1933)9 月、腎臓病で永眠。享年 47 歳。

佐々木は、民俗学がまだ草創の時代に、はやくも民話研究に着手していた。彼は 400 編以上の話を収集し、その話の質の高さは今日まで高く評価されている。佐々木のこの功績に、金田一京助は彼を「日本のグリム」と称した。



山口の水車小屋(佐々木の生家近く)

5 『遠野物語』・高木誠一 関連年表

年	『遠野物語』・柳田國男・佐々木喜善・高木誠一 関連事項
明治8年 1875	7月、柳田(松岡)國男、兵庫県福崎町(旧田原村)に生まれる。
19年 1886	10月、佐々木喜善、岩手県遠野市土淵(旧土淵村)に生まれる。
20年 1887	2月、折口信夫、大阪府大阪市浪速区鷗町(旧木津村)に生まれる。 3月、高木誠一、福島県いわき市平北神谷(旧北神谷村)に生まれる。
39年 1906	9月、佐々木、東京本郷の下宿で水野葉舟に遠野の昔話を語る。
40年 1907	8月、高木、小田原で産業組合の講習会に柳田と初めて会う。
41年 1908	11月、佐々木、水野葉舟と柳田を訪れ、遠野の昔話を話す。 柳田、『遠野物語』執筆を始める。
42年 1909	3月、『後狩詞記』を自費出版。 8月、柳田、遠野を訪れる。伊能嘉矩宅と佐々木宅を訪ねるが、留守。
43年 1910	柳田、『石神問答』『遠野物語』『時代ト農政』を出版し、新渡戸稻造宅で「郷土会(郷土研究会)」結成、高木も入会。南方熊楠との文通を始める。
45年 大正元年 1912	4月、佐々木、「遠野雑記」を「人類学雑誌」に発表。 5月、「日本民俗学会」が設立され、雑誌「民俗」を創刊。
2年 1913	3月、柳田、高木敏夫と雑誌『郷土研究』を創刊。高木、第1巻第4号に「白鍬祭」発表。第6号に「三宝荒神」発表。第9号に「鼻取地蔵」を発表。
3年 1914	1月、佐々木、「陸中国遠野郷にての冬期間における年間行事の一例」を「東京人類学雑誌」に発表。8月、「ザシキワラシ」を「郷土研究」に発表。 7月、南方熊楠、「郷土研究者に与へる書」を「郷土研究」に発表。
4年 1915	3月、佐々木、「オシラサマとオクナイサマ」を「郷土研究」に発表。 7月、ネフスキー、来日、折口信夫の紹介で柳田と会う。 9月、高木、「郷土研究」第3巻第7号に「磐城石城郡草野村より」を発表。第9号に「国々の言習はし(12)磐城石城郡」を発表。
5年 1916	3月、高木、「郷土研究」第3巻第12号に「磐城の田楽祭り」を発表。第4巻第4号に「磐城平地方の十九夜講」を発表。第6号に「磐城石城郡の庚申待」を発表。第7号に「磐城四倉浜の火打合」を発表。
6年 1917	9月、ネフスキー、民俗調査のため遠野を訪れる。 1月、高木、「郷土研究」第4巻10号に「磐城地方の鳥小屋」を発表。第11号に「磐城石城郡より」を発表。
7年 1918	8月、折口信夫、雑誌「土俗と伝説」を創刊。
9年 1920	2月、佐々木『奥州のザシキワラシの話』を出版、高木の報告も紹介。 8月、柳田、東京朝日新聞社客員になる。東北旅行の途中に遠野を訪れ、伊能嘉矩、鈴木重夫、佐々木らと会う。 ネフスキー、柳田の紹介で高木を訪ね、オシンメサマの調査をする。その後、遠野へ向かう。柳田、沖縄旅行(~翌3月)。『爐辺(ろへん)叢書』を出版。

『遠野物語』・高木誠一 関連年表

年	『遠野物語』・柳田國男・佐々木喜善・高木誠一 関連事項
大正10年 1921	柳田、国際連盟委任統治委員になり渡欧(アメリカ・欧州各地)。 高木、柳田からハガキ「北神谷記」、「石城の民間信仰是非御まとめ被下度候」
11年 1922	柳田、東京朝日新聞論説員になり、再渡欧(ドイツやイギリス等)。 高木、柳田からハガキ「早く君の地方の民間信仰誌もまとめて見せてください」
13年 1924	佐々木、「老媪夜話」を雑誌「三田評論」に発表。
14年 1925	9月、伊能嘉矩、59歳で永眠。 8月、「北方文明研究会」が設立され、柳田、中山太郎、金田一京助、折口信夫をはじめ多数参加。
15年 昭和元年 1926	3月、佐々木、『東奥異聞』を出版する。 柳田、伊能嘉矩の追悼公演会で遠野を訪れる。 7月、高木、『石城郡北神谷誌』の「はじめに」を執筆。
2年 1927	柳田、小寺融吉、折口信夫、金田一京助らとともに「民俗芸術の会」を設立。
3年 1928	2月、佐々木、仙台へ移る。
4年 1929	1月、佐々木、「ザシキワラシの話」を「東北文化研究」に発表。 7月、「民俗学会」が設立され、雑誌「民俗学」が創刊される。 佐々木、ラジオの「東北土俗講座」講演を柳田や折口に依頼する。
5年 1930	この夏、折口信夫が仙台で佐々木と会い、遠野を訪れる。
6年 1931	1月、佐々木、『聴耳草紙』を出版。
7年 1932	8月2日、柳田、北神谷の高木を訪れる。
8年 1933	9月、佐々木喜善、永眠。享年47歳。
10年 1935	7月、『遠野物語 増補版』出版。 9月、高木を中心に「磐城民俗研究会」発足。 桑原武夫が遠野を訪れる。
12年 1937	7月、桑原武夫、「遠野物語から」を雑誌「文学界」に発表。 9月22日、柳田、平の旧マルトモホールで講演する。
16年 1941	折口信夫、教え子の山下久男を遠野に赴任させ佐々木の研究を行わせる。
19年 1944	4月、高木、柳田の古希記念に岩崎敏夫たちと「村の生活聞書」を進呈。
24年 1949	4月、「民間伝承の会」を「日本民俗学会」と改称。柳田が初代会長となる。 雑誌「日本民俗学」創刊。
28年 1953	8月、折口信夫の筆になる佐々木の墓石建立。 9月、折口信夫、永眠。享年66歳。
30年 1955	9月、高木誠一、永眠。享年68歳。 12月、『磐城北神谷の話』出版される。
37年 1962	8月、柳田國男、永眠。享年87歳。

6 いわきを記す 高木 誠一

たかぎ せいいち (1887.3.17 - 1955.9.7)

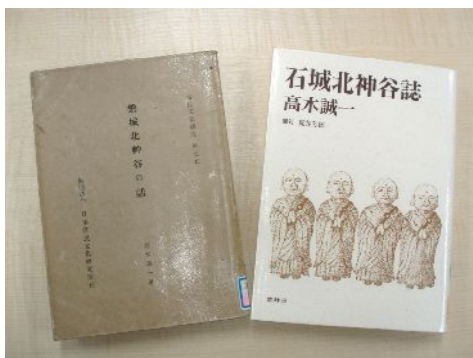
明治20年(1887)、いわき市平北神谷(旧、石城郡北神谷村)に父・伊勢治、母・トラの長男に生まれる。高木家は村の名主を務めた旧家であった。小学校卒業後、磐城中学校(現、磐城高校)に入学するが、「百姓に学問はいらない」と親たちの考えで退学。その後、母校の小学校で代用教員をするが、家業の農業に就く。そのころの農業は、安い外国産物の輸入と凶作の被害で、技術と経営の改善が急務とされ、産業組合政策がとられていた。

明治40(1907)8月、神奈川県小田原で行われた産業組合の講習会に出席し、講師の柳田國男と出会う。明治43(1910)柳田が、新渡戸稲造、石黒忠篤、小野武夫らと「郷土会」を結成すると高木も参加し、協力者、助言者となる。

大正2年(1913)と翌年に開かれた農家経済講習会で愛知農林学校の山崎延吉の講演に感銘を受ける。また、農学者・横井時敬の影響をうけ農業改良や、農村改善運動に力を尽くす。

一方、柳田が主宰する雑誌「郷土研究」に「白鍬祭り」をはじめ、次々にいわきの伝説や昔話、年中行事、ことわざなどを発表する。柳田からの信頼も篤く多くの書簡が交わされ、調査報告や資料を提供しながら助言を受ける。佐々木喜善、ネフスキー、中山太郎など多くの民俗研究者たちにも協力し、日本の民俗研究に貢献する。

いわきにおいては、昭和10年(1935)9月、高木が中心となり「磐城民俗研究会」をつくり、いわきの民俗学の基礎をつくる。また、篤農家で、優良農業者でもあり、いわき民俗学の育ての親でもあった彼のもとには、農学者や農業研究者ばかりではなく、柳田、ネフスキー、渋沢敬三、宮本常一など多くの民俗研究者が訪れた。高木を二度訪れた宮本常一は、その著『忘れられた日本人』に、「文字を持つ伝承者」として高木を詳しく紹介している。



日本常民文化研究所から出版された『磐城北神谷の話』(上左)と校本が翻刻された『石城北神谷誌』



宮本常一はその著『忘れられた日本人』で、高木を写真とともに詳述する。上写真は、木村哲也著『「忘れられた日本人」の舞台を旅する』に載せられた高木。宮本の本と同じ写真が載る。

昭和30年(1955)9月7日永眠。享年68歳。高木の研究はその年の12月、『磐城北神谷の話』として渋沢敬三が主宰する日本常民文化研究所から出版された。

7 参考・関連資料

No.	書名	著者	出版社	発行年	分類記号
1	遠野物語へようこそ	三浦佑之 赤坂憲雄	筑摩書房	2010	S382.1ミ
	*「遠野物語」の物語を読み解き、そのおもしろさの秘密にせまる。				
2	増補版 遠野／物語考	赤坂憲雄	荒蝦夷	2010	382.1ア
	*「遠野物語」とは何か、新たな視点から読み解く。				
3	遠野物語と21世紀 近代 日本への挑戦	石井正己 遠野物語 研究所 編	三弥井書店	2009	382.1キ
	*「遠野物語」は21世紀にどのような意義をもつか多面的に考察。				
4	「遠野物語」を読み解く	石井正己	平凡社	2009	S382.1イ
	*物語の背景にあるものと都市伝説としての「遠野物語」を解き明かす。				
5	遠野物語再読	風見良彦	試論社	2008	382.1カ
	*遠野物語をアメリカ文学との比較から読み解く。				
6	小説とは何か 9章	三島由紀夫	新潮社	2003	918 ミシ3
	*「遠野物語」の文学性を高めた。「決定版三島由紀夫全集34」				
7	柳田国男と遠野物語	石井正己	三弥井書店	2003	382.1イ
	*「遠野物語」と柳田、佐々木、折口信夫らとの関係を明らかにしながら、その本質を探る。				
8	柳田国男と遠野紀行	高柳俊郎	三弥井書店	2003	382タ
	*柳田の遠野での足取りを追い、「遠野物語」誕生の頃の遠野を描く。				
9	遠野物語辞典	石井正己 監修	岩田書院	2003	R382.1ト
	*遠野物語の語句から遠野物語を網羅して解説。				
10	図説 遠野物語の世界	石井正己	河出書房新社	2000	382.1イ
	*「遠野物語」執筆から出版までの過程を検証する。物語をヴィジュアルで読む。				
11	「遠野物語」を歩く	菊池照雄 文	講談社	1992	382キ
	*「遠野物語」の舞台と背景をヴィジュアルに解説。				
12	山深き遠野の里の物語せよ	菊池照雄	梟社	1989	382.1キ
	*「遠野物語」を遠野の口承話から解説。				
13	新釈 遠野物語	井上ひさし	筑摩書房	1976	SS Fイ
	*「遠野物語」を意識し、怪異譚全体をたどりながら一つのお話に完結。				
14	共同幻想論	吉本隆明	角川書店	1982	B914.6ヨ
	*「遠野物語」と「古事記」にみられる共同性を考察する。				
15	古代感愛集 遠野物語	折口信夫	中央公論社	1997	918 オリ26
	*古書店から買い求めた「遠野物語」の思い出を詠む。「折口信夫全集26」				
16	遠野物語（後の新片町より）	島崎藤村	筑摩書房	1973	918 シマ10
	*友人であった藤村の「遠野物語」評。「島崎藤村全集10」				

No.	書名	著者	出版社	発行年	分類記号
17	遠野の奇聞	泉鏡花	岩波書店	1942	918 イ28
	* 鏡花の「遠野物語」評。「鏡花全集28」				
18	遠野奇談	佐々木喜善	河出書房新社	2009	388.1サ
	* 喜善が書くもうひとつの「遠野物語」。				
19	遠野物語の周辺	水野葉舟	国書刊行会	2001	382.1ミ
	* 水野は「遠野物語」以前に佐々木から聞き取り遠野の物語を発表していた。				
20	遠野のザシキワラシとオシラサマ	佐々木喜善	宝文館出版	1988	B388サ
	* ザシキワラシとオシラサマの研究の書。高木やネフスキーの調査報告も載る。				
21	遠野物語の人 わが佐々木喜善伝	山田野理夫	椿書院	1974	SS 382ヤ
	* さまざまな挫折を余技なくされるが、異郷に没するまで不屈の挑戦を放棄しなかった喜善の生涯。				
22	岩手県上閉伊郡昔話集	佐々木喜善 採録	三省堂	1973	388.1ヤ 2
	* 佐々木喜善の「聴耳草紙」から、遠野で採集された昔話を整理した。				
23	復刻 老媪夜譚	佐々木喜善	遠野物語 研究所	2008	388.1サ
	* 辻石谷江(はねいしたにえ)から聞いた話をまとめる。昭和2年出版を復刻。				
24	東奥異聞(世界教養全集21)	佐々木喜善	平凡社	1961	080セ
	* 口碑、伝説を分類、考証の分野にまでおよぶ当時としては異例な試み。				
25	磐城北神谷の話	高木誠一	日本常民文化 研究所	1955	AL382タ
	* 高木が民俗研究者に協力して研究報告、発表したものや、彼らとの書簡集。				
26	石城北神谷誌	高木誠一 夏井芳徳 翻刻	雄峰舎	2007	AL384タ
	* 高木の稿本には「磐城北神谷の話」に所収されなかったものや未発表のものがあった。				
27	忘れられた日本人	宮本常一	岩波書店	1984	B382ミ
	* 高木を訪問し、「文字を持つ伝承者」として高木誠一を紹介。				
28	「忘れられた日本人」の舞台 を旅する	木村哲也	河出書房新社	2006	382.1キ
	* 宮本常一が訪れた高木家を、木村がその後をたずね、高木の事跡をたどる。				
29	月と不死(東洋文庫 185)	ネフスキー	平凡社	1977	382.1ネ
	* 「月」という視点から「不死」が浮かび上がると考察する。書簡集に高木へ言及した記述がある。				
30	いわきの人物誌 (上)	いわき地域学会編	いわき市	1992	AL281イ
	* 農業経営改善と技術改良、民俗学、農業経済史の研究に協力した高木を紹介する。				
31	いわき市史 第7巻 民俗	いわき市史編さん委員 会編	いわき市	1972	AL 210.1ー 1イ
	* いわき民俗学の育ての親・高木誠一を紹介。				

検索機で

遠野物語

検索



してきましょう!

